

Masking / Unmasking

死 သေခြင်းတရားကို ဖုံးကွယ်ခြင်း/ခွါချခြင်း Death

をマスクする / 仮面を剥がす

Masking/Unmasking Death 死をマスクする／仮面を剥がす

会期：2022年5月1日（日）～10日（火）10:00～17:00 会期中無休

会場：東京藝術大学大学美術館 陳列館

入場料：無料

主催：東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科 アートプロデュース専攻（GA）毛利嘉孝研究室、東京藝術大学グローバルサポートセンター（東京藝大AAI）、合同会社UPN

助成：公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京 [スタートアップ助成]、公益財団法人 花王芸術・科学財団

キュレーター：居原田遥

アーティスト：カミズ

企画協力：TERASIA

プロデューサー：坂田ゆかり、渡辺真帆

資料制作・写真及び作品資料提供：Bullet Holes Country（北角裕樹、アウン トゥン リン）

展示・設営：加藤康司、川田淳、寺田鵬弘、志村誠、ニーナ・ボグシェフスカヤ

展示物品（Tree）制作：林周一、河内哲二郎

広報：遠藤未来子

翻訳：ティン ティントゥン、梶田唯、キャサリン・ハリントン、渡辺真帆

会場運営：東彩織、鈴木大翔、INHO

ロゴ・フライヤー・ポスターデザイン：中本那由子

記録写真：富田了平

ウェブサイト制作：株式会社エボルニ

「Masking/Unmasking Death」とは何か

カミズ（アーティスト）

生まれることと死ぬことは、生きとし生けるものに普遍の過程です。いつ、どのようにして生まれ、死ぬかは、私たちにはコントロールできない不可知の領域で、コントロールできるのは、誕生と死、その間をどう生きるかのみです。名誉の死、誰にも知られない死、忌み嫌われる死。それらはすべて、死ぬまでの生き方で決められます。人間は時、場所、状況に応じさまざまな顔のマスク／仮面をつけながら生きていますが、死ぬとき、すべての仮面は剥がれるのです。

これは単なる美術展ではありません。この展示には複数の本質があります。

2021年2月以来の革命で、軍事政権／国軍の恐怖と抑圧からの自由を求めて闘い、英雄として命を落としたすべてのミャンマー市民に敬意を表し、名誉を授ける場。彼／彼女らの死から仮面を取り払うと、その高潔さと、どんな人生を送っていたかがわかります。

また、鑑賞者が自身にとっての「死」について内省し、思いを馳せる場でもあります。立ち止まって、自分の死がどんなものになるか、少し仮面を外して考えてみてください。

そして最後に。この展覧会は私たち人間が連帯のエネルギーを感じ、生と死の認識を交える場なのです。

「絶望」を越えるために。

居原田遥（キュレーター）

「Masking/Unmasking Death 死をマスクする／仮面を剥がす」（以降略称「Masking/Unmasking Death」）は、ミャンマーのクーデターで生じた暴力の犠牲となった人々の「死」を受け止め、その死を元にした創作によって希望を見出そうとするアーティストの試みを繋ぐための展覧会である。同時に、このマスクとなった「倒れた英雄たち」（Fallen Heroes）の詳細なデータと、クーデター以降にミャンマーで起きていることについて、私が目にしてきた情報や言葉たち、日本のジャーナリストによって撮影された写真、日本に住むミャンマー人アーティストが起こしているアクションとともに、紹介している。

アーティストのカミズによるメッセージにもあるように、「Masking/Unmasking Death」は「単なる美術展」ではない。私も同じく、「Masking/Unmasking Death」は、個人のアーティストの表現を見せるためだけの場ではなく、ミャンマーのクーデター以降の事実をより深く理解し受け止め、そして、彼女の表現に込められた意思を繋ぐためのアクションとして取り組んでいる。展示内のマスク（仮面）それぞれに添えられているQRコードから見る事ができる、彼／彼女たちの情報には、可能な限り、目を通して欲しい。「倒れた英雄たち」の死を目にし、生きている私にはなにを繋ぐことができるのか。また、それらを繋ぐカミズの想いは、どこに届けばよいのだろうか。この空間で出会う情報と表現、カミズが提案する「死」との対峙を経験し、絶望的な現実を受け止めながら、同時に、それらを希望に変える回路を、共に思考してほしい。そんな想いを込めた場である。そしてここでは、展示空間では示せなかった、本展開催に至るきっかけと、ミャンマーとの個人的な背景を補足したい。

*

本展のきっかけは、主催団体でもある UPN（坂田ゆかり、渡辺真帆）が中心的役割を担う「テラジア 隔離の時代を旅する演劇」（以降名称略：「テラジア」）というプロジェクトである。「テラジア」は、2018年に日本で上演した『テラ』という演劇作品を元に、同作品でキーワードとして取り扱われる「死」や仏教、また寺が文化的に重要な位置付けにあるアジア諸国のアーティストチームと日本のメンバーが共に、パンデミック下で遠隔の協働によって新たな作品を創作することを目的としたプロジェクトである。その相手の一つがミャンマーのアーティストたちだった。だがその最中、クーデターが起こる。そしてミャンマーのアーティストらと、このプロジェクト「Masking/Unmasking Death」を日本で、展覧会という形式で行うというアイデアに至ったのだ。日本で行われた「テラ」を手がけた坂田をはじめ、出演者たちは東京藝大の卒業生で学生時代の先輩でもあったという縁もあり、私に声をかけていただき、現在の開催に至る。カミズとの繋がりを築き、さらにはこのような状況でも彼女と創作を通じた連帯を保ち、そして、展覧会開催に必要な運営や制作において「テラジア」のメンバーの存在は欠かせない。なにより彼／彼女たちのアジアを横断するという希望に満ち溢れた願いと、その繋がりを維持し続ける強い意思と営みが、ここには込められている。

*

私がミャンマーをはじめて訪れたのは2017年だ。当時は東京オリンピックが控え、コロナウィルスがもたらす世界の変容など微塵も想像も出来ないほど、「移動」の時代を迎えていた。この東京芸術大学も、ASEAN 5カ国にある8つの芸術大学との国際交流事業に乗り出していた。そのコーディネーターに着任した私は以降の7年間、度々その機会を通じてミャンマーを訪れることになった。クーデター以前のミャンマーは、さまざまなエネルギーに満ち溢れていた。東南アジアのなかでも王国の歴史から続く独自で力強い伝統文化を保ち、さらに、国際社会の介入・進出を背景とした破竹の経済成長の最中であつた当時、そこで生きるアーティストたちの創作に向ける思いとその勢いは、私が知っているいわば「新しい文化」との出会いのなかでも、忘れられないほどの衝撃があつた。そしてコロナを経て、クーデターが起こる。VPNが遮断され、時に連絡がつかないこともあつたが、Facebook上の友人達のタイムライン、または短いメッセージから届く悲惨な状況を見聞きしてショックを受けながら、同時に日本社会での情報流通、報道の少なさや議論がなされていないことに歯痒さを覚えてばかりだった。クーデターに関しては、オンライン上にはたくさんの情報と、それらを拡散する意思やメッセージが溢れている。しかしそれらを受け取り、実際の「行動」へと繋げていく機会と手段がないのだ。ミャンマーのクーデターを受けたこの社会に欠けているのは、これらの情報や意思を受け止める場であり、そしてそこで生まれる意思やアイデアを次へと繋げていく方法である。

しかし、その状況を解決するのは難しく、時間だけが過ぎていく。ミャンマーで起きたクーデターで覚えたのは、この「なにも起こせない」という、途方もない絶望だった。当たり前で自由と未来を求める人々に対し、非道かつ不当な暴力が止まらない。声をあげるだけで命の危険にさらされ、時には全てを奪われ、恐怖を抱えながら耐え凌ぎ生きる人々がいる。諦めることなく、抵抗を示す声。あるいは、沈黙を続けながらも可能な手段で届く意思。拡散を求め広がり続ける情報。絶え間なく生じ続けるこの「絶望」を受け止め、またそれらを越え、そして理不尽な社会に抗うため、アートをはじめとする表現ができる／すべきこと、あるいはこの「絶望」を目にする人々にできることは、希望のための文化的連鎖を絶やさず、繋ぎ続けることである。「Masking/Unmasking Death」は、小さな取り組みなのかもしれない。しかし、このアクションが、誰かの新しい意思とこの絶望を超えるアイデアに繋がることを、願っている。

カミズ (アーティスト)



ミャンマー出身のアーティスト、アート・セラピスト。20年以上にわたってビジュアルアートの分野で活動し、国内外のアートプロジェクトやワークショップに参加する。アートは誰にでも平和と心の安らぎ（マインドフルネス）をもたらすことができると強く信じており、本人が気づいていなくとも、視点を変えればすべての人間がアーティストであると言う。アートが感情の旅として、人と人との交流、また人が自分自身や他者、そして自然とつながるためのプラットフォームとなることを願っている。作品はリサーチに基づき、手法は絵画やドローイングに限定されない。これまでにミャンマー、日本、マレーシアで4回の個展を開催したほか、多くの国際芸術祭、アートフェア、アーティスト・レジデンシーに参加。グループ展への出展はミャンマー、オーストリア、日本、香港、タイ、インドネシア、マレーシア、シンガポールなど20回以上を数える。近年は表現療法のスペースを設立し、アートとヒーリングのワークショップやプログラムを主催している。ミャンマー国軍によるクーデター勃発後は、安全のため本名などの身元を伏せて活動。

居原田遥 (キュレーター)



1991年沖縄県生まれ。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻博士後期課程在籍、日本学術振興会特別研究員(DC1)。東南アジアの美術や文化的アクティビズムを研究対象とし、沖縄を含むアジアのアートの展開に関する実践研究を行う。また同対象の美術・映像・映画等の作品制作のコーディネートをはじめ、キュレーターとして活動。主な企画に、ドキュメンタリー映画『CONSTELLATION』（中森圭二郎監督）企画・制作（2016）、「美しくければ美しいほど」企画（原爆の図 丸木美術館、埼玉、2018）「HOTEL ASIA Unidentified Landscape 2018」キュレーション（沖縄、福岡、重慶市・中国 他、2019）、「白川昌生個展 ここが地獄か、極楽か。」キュレーション（原爆の図 丸木美術館、2021）、「琉球の横顔―描かれた「私」からの出発」（沖縄県立美術館・博物館、2021）企画協力など。